



ドクター板東の メディカルリサーチ

Vol. 104

～闘牛で 命を考え 将来へ～

<http://pianomed-mr.jp/>

プライマリ・ケアの領域で家庭医(family doctor)の国際学会(WONCA)がある。今回、ポルトガルでの大会が開催され参加した。

その際、スペインにも立ち寄ることに。今回は両国の医療や文化などについて触れてみたい。

マドリッドへ

スペインの高速鉄道であるAVEで時速303kmを体験して、首都マドリードに到着した。宿はいつも駅に最も近く便利なホテルを選んでいる。

嬉しいことに、本駅前は「芸術の黄金三角地帯(Golden Triangle of Art)」と呼ばれる地域エリアだ。プラド美術館や国立ソフィア王妃芸術センター、ティッセン・ボルネミッサ美術館など多くのMuseo(museum)が集中している。

スペインと聞いて、日本人が連想するのは、フランコ、闘牛、ガウディ、ピカソ、パエリアなどであろう。事前にある程度調べ、あとは現地で尋ねてみるこ

とに。運良く週に一度、日曜日の夜だけしか観られない「闘牛場」に出かけた。

スペインの闘牛場

近年、闘牛を見る機会は激減している。すでにスペインのバルセロナでは興業が終わり、マドリッドの闘牛は限られた機会となる。ラス・ベンタス闘牛場(Plaza de Toros de Las Ventas)は国内最大級の闘牛場だ(図1)。収容人数が2・4万人と、メキシコ、ベネズエラの闘牛場に次いで世界第3位の規模という。闘牛のシーズンは3～



図1

いまは夏季なので、午後7時30分から始まった。チケットは1階席から4階席まで価格帯が分かれる。さらに、日向(sol)と日陰(sombra)、中間(sol y sombra)の3種類ある。これらの違いの詳細がわからなかつたが、実際に観客席に座って、ようやく把握できた(図2)。

闘牛のパフォーマンスが始まつた。私たち日本人がテレビなどで紹介されている情景は、「赤いマントの主役の闘牛士が命をかけて、突進してくる闘牛を、紙一重で華麗にかわす」というものだ。

しかし、実際に拝見する



図2



図3

・場内に闘牛が入ると、槍を持つた騎士が馬に乗つて登場(図3)。馬の目には真黒の布が巻かれる。・牛は元気一杯で、闘牛士と対決するのではない。最初に長い槍で頸部を刺され、出血を起こす。

・流血が続く牛を、助手の闘牛士が挑発してさらに走らせる。牛は頻呼吸で喘ぎ心肺機能が低下し次第に動けなくなる。助手が頸部にカラフルな色を施した槍を突き刺していく。

・その後、主役が登場し、弱った牛が倒れ、観衆が拍手を送る(図4)。

・最後に、苦しませないよう、頸部に深く隙をたてる。動かなくなつた牛は、3頭の牛が綱で引っ張り、場内を一回りして退場する。

実際の闘牛をみると、今までのイメージとはほど遠い。



図4



図5

欧洲の学会

欧洲WONCA大会は数年ごとに開催されており、私はイスタンブール(2008)、ワルシャワ(2011)に参加した。今回の第19回大会はリスボンの国際会議場で開催された。(図5)。

New Routes for General Practice and Family Medicine



図5

最近WONCAは国際的に発展している。本大会の参加3700名、発表数1800と大規模で大成功を収めた(図6)。

私は糖尿病と糖質制限に関するポスター発表を行つた。その際、ポルトガルの糖尿病専門医と議論をすることに。

同国では20~79歳の人々が糖尿病に罹っている割合が12.9%という。日本より少ないようだ。ただし、近年肥満が増え、メタボの頻度も増加している。欧米と日本において、人種における体质や、食事(パン、米、糖質)摂取の違いなどについて、興味深い学びの機会を得た(図6)。



図6

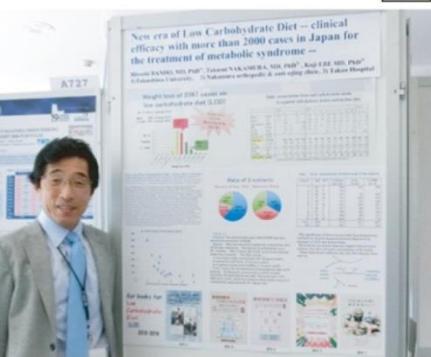


図7

バスク・ダ・ガマ

欧洲全体で若い医師が卒後教育の改善を進めており、バイオニアの意味を込めバスク・ダ・ガマ運動と呼んでいる(図8)。

ポルトガル出身のVasco da Gama(1460頃~1524)はポルトガルの航海者、探検家。欧洲からアフリカ南岸を経て印度へ航海し、海上帝国の基礎を築いた。世界初の業績で彼は尊敬され、ポルトガルでは偉人の一人として知られる(図9)。

da Gama(1460頃~1524)はポルトガルの航海者、探検家。欧洲からアフリカ南岸を経て印度へ航海し、海上帝国の基礎を築いた。世界初の業績で彼は尊敬され、ポルトガルでは偉人の一人として知られる(図9)。

命について

今回、闘牛場でのエピソードから「命」を考えた。

漢字の命||令十口。令は深い儀礼用の帽子を被り、跪いて信託を受ける人の形。口は日(神に対する祝詞を入れる器の形。以上から、命とは神に祝詞を唱えて祈り、神の啓示として与えられるものを意味する。

命→生命に、運ぶ、運ばれる命→運命、命運、宿命へと展開していく。命をかけ航海に出たバイオニア魂は尊く、どの時代でも歴史を切り開いていくだろう。

(板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、ピアニスト)



図9